

## 情報理工学部英語教育プログラムについて

情報理工学部英語教育プログラムでは、皆さんが将来、日々のメールのやりとりや情報収集に加えて、英語論文の読解・執筆、学会での研究発表とそれに続く質疑応答、非専門家であるクライアントの要望やニーズを聞き取り多国籍のメンバーで構成されるチームに伝えるといった場面で英語を使用することを想定しています。対話の参与者に応じた柔軟かつ専門性の高い英語運用能力、研究活動へとつながる英語運用能力の修得は、学部設置以来、一貫して目指してきたゴールです。

一方、学部設置から20年の間にICT分野での技術は大幅に進展しました。今日、文字を媒体としたやりとりにおいては生成AIやニューラル機械翻訳などのツールを活用することができます。より効率的に、より間違いのない英語表現で書くことにとどまらず、そうしたツールが提案する表現を学ぶことによって自らの英語運用能力をより高めることもできるようになりました。曖昧さや多義性を回避し一義的な表現のみで構成する（そしてその意味で特殊な言語使用である）学術論文の執筆において、これらツールがもつアドバンテージは特に際立ちます。しかし、これらのツールが提案する表現がまさに自分が意図していた内容を表現しているのか、複数の候補の中からどの表現を選択すべきなのか、あるいは、そもそも提案された表現を採用するか否かを自らが判断できなければ、ツールとその使用者の関係性は逆転してしまいます。

口頭でのコミュニケーション場面では、たとえ同じ言語の母語話者同士であったとしても、何らかの齟齬が生じることも意図がうまく伝わらないことも往々にしてあるでしょうし、異なる文化的・言語的背景をもつ者が集う場ではなおさら不可避です。そのような場で、自らの考えだけが唯一の解であるという強弁も、「私たち」と「あの人たち」といった範疇化で分断を煽り自らの熱狂的な信奉者を鼓舞するスピーチも、決して望ましいコミュニケーションの形ではありません。同じ共同体に生きる者としてお互いの存在を認め合い、共通理解を構築するために粘り強く言葉を尽くす姿勢こそが、『立命館憲章』にいう「多文化共生の学園」に学び、「正義と倫理をもった地球市民」を目指す上で不可欠だと考えます。

情報理工学部では、皆さんが、ICT分野での専門家で構成される共同体に、上述した判断力と姿勢を身につけた自律的な英語使用者として参画することを期待しています。そのためには、確かな英語の知識とスキルを身につけた上で、専門的な文脈、状況下で英語を使用することが必要だという認識に立ち、学部設立当初からプレゼンテーション科目を中心にプロジェクト型の英語授業を導入してきました。2017年度からは、英語を学ぶ「英語初級・中級」科目、英語の使い方を学ぶ「英語上級」科目、英語で学び発表する「Professional Communication 301・303」「Academic Literacy 302・304」といった多様な学びの目的を持つ科目を開設し、パッケージ履修によって体系的に英語運用能力を高めるプログラムを展開してきました。この方針は今後も継続します。言うまでもなく、必修10単位分の英語科目を通して到達できる英語運用能力とICT分野での職業的・学術的な英語使用を可能とする英語運用能力との間にはギャップがあります。このギャップを埋めることを目指して、2024年度からスタートする新カリキュラムでは、共通専門科目として開設されてきた「Presentation Plus 401」「Writing for Publication 402」に加えて「Advanced Academic Reading 403」を新設し、これら400番台科目の履修要件を引き下げることで高回生が英語の学びを継続できるようにしました。400番台科目では英語教員と専門教員がコラボレートすることも確認されています。これらの科目以外にも「グローバルIT科目」として海外IT英語研修プログラムやグローバルインターンシップといった科目を展開し、ICT人材としての成長を支援します。

英語運用能力の修得は英語科目10単位の修得で終わることはなく、ICT人材としての成長も科目履修だけで到達できるゴールではありません。自律的な英語使用者、グローバルな舞台で活躍できる人材へと成長するためには、皆さん自身が自発的に学び続けることが必要だという点は、これまでのカリキュラムの基本であり、またこれからも変わることはありません。皆さんが高い志をもち安心して英語の学びを楽しむことを私たちは願っています。